

⑩＜生徒指導 個への指導＞

一人一人の児童生徒の理解を深め、個に応じた指導の具体を明らかにしていく
校内研修は？ 【キーワード】記録 対話 子どもの見方

【事例1：記録の継続から見えてくる、子どもの変容と教師のかかわり】

1 ねらい

個に応じた生徒指導の具現のために、具体的な事例を通して一人一人の児童生徒についての理解をより深めることで、教師自身の児童生徒の見方や指導力を高めていく。

2 内容・方法

- (1)学級担任が心を寄せたい児童生徒を一人決め出す。
- (2)その児童生徒の客観的事実と、その姿から教師が感じたこと、考えたことを記録していく。
- (3)その記録を持ち寄り、研修グループ全員でその事実から捉えたその児童生徒の姿や変容、これからの指導・支援の方向について話し合う。毎週の研修の時間を使って、毎回短時間でもそのサイクルをたくさんまわしていく。結論を得るための話し合いでなく、その児童生徒にかかわっていく教師が、「よし、次はこうやってかかわってみよう」「こんな支援をして授業をしてみよう」と、次の方向が見えてくればよいものとする。

3 校内研修の様子

- ・各担任が自分の記録を人数分印刷し配付する。一人の児童について10分から15分くらいの時間で、互いに気付いたことや感じたことを伝え合っていく。
- ・過去の記録も同時に読み返しながら、短い期間では見えてこなかったその児童生徒の変容や教師のかかわり方の変化についても、長いスパンで見えていくことで捉えられるようにしていく。
- ・特別支援教育コーディネーターや特別支援学級の担任、養護教諭もかかわりながら、合理的配慮の必要性や保護者との連携についても話題にし、組織的、計画的に個への指導について取り組んでいかれるようにしていく。



研修後のまとめ

研修グループのN先生は、研修を始めてからの2か月を振り返って次のような感想をもった。

こうして記録を積み重ね、先生方の話を聞くことで、自分の指導を振り返ったり、解決の糸口を探ったりしています。他にもいろいろな子がいるので、自分の対応が、本当によいのか迷っていることも多く、先生方に聞いてもらうことで、私自身が安心したり、反省したりしています。

N先生は、記録と対話を手がかりにして、自分の指導を見返しながら、これからの具体的な指導の方向を見いだしていった。そして、教師自身の迷いや不安、葛藤を伝え合いながら、自分の現在や過去の児童生徒へのかかわりや指導を振り返り、意味付けていく取組となっていた。また、児童生徒の姿について語り合っていくことは、同僚に対して自分を開き、思いを伝え合う関係性を築くことにつながる。学び合う実践者として教師同士がつながっていくことで、教師相互の同僚性を高め、学校が一つのチームとして児童生徒への理解を深めながら、組織的、計画的に生徒指導にあたっていくことの具現にもつながる。

▶セルフチェック⑩-7

【事例2：高め合おう！子どもの今を見る教師の眼】

1 ねらい

- ・個別の配慮や指導を要する児童生徒の課題を絞り込む。
- ・児童生徒の実態を見る目を養う。
- ・様々な指導、支援方法の具体を探る。

2 内容・方法

- (1) 学級担任が、個別の配慮や指導を要する児童生徒について、その実態や困っていることをシートにまとめる。
- (2) 5～6名でグループをつくり、持ち寄ったシートをもとにグループ討議を行う。
- (3) グループ討議は、学級担任からの説明1分、質問3分（1問1答形式）、考えられる指導支援の内容を付箋に記入3分、付箋の内容を発表7分、学級担任の感想1分の、計15分で1クラスを終える。

3 参加者の感想

- ・一人の子どもを連学年で注視していく組織作りは必要です。また、研修後には、その子どもへのアプローチの仕方が増えました。
- ・学年の枠を超えて、一人の子どもの姿について語る貴重な機会だと思います。短時間でも、自分の学級の子どものことを話すことで、自分の指導やその子どもの現状が浮かび上がってくることを感じました。
- ・日ごろ意識する機会が少ないのですが、その子なりの確かな成長を感じることができました。また、同じ悩みがあるんだと分かっただけでも励みになりました。



▶セルフチェック⑩-1